

平成23年11月号

古田土流 目次決算書を日本中に広めたい

JDL、TKC等会計事務所専用機メーカーから打ち出される目次の資料は試算表といふ決算書とはいいません。資料自体は、確定した決算書を作るための目次の資料だからです。経営に役立つというより決算のための資料ですが、会計事務所の仕事は監査(チェック)が主体となります。古田土会計の目次決算書は、中小企業の経営に役に立たないという思いから、過去会計ではなく、「どこに手を打てば利益が出るか」「どうすればキャッシュフローがよくなるか」「理想の貸借対照表にするためにはどうすればよいか」という未来を向いています。古田土流といっているのは目次決算書の内容に古田土会計の独自性がいつはいつまわっているからです。

まず目次試算表ではなく、目次決算と言っているのは、年計表にあります。毎日々年間の売上、粗利益、固定費、経常利益が出ています。年計グラフと数字で出ています。毎日決算をやっているのと同じです。未来会計図は、「人事屋が書いた経理の本」のストラク図を参考に、私が中小企業の経営者、幹部ばかりではなく、パート、アルバイトの方でも数字を理解できるようにデザインをかん、わかりやすいように図の中に解説をかん、右側には儲かるためのポイントとなる言葉や目安となる比率も入れました。売上高経常利益率の目安は、私が独自に考えたものです。中小企業の経営者には業種に関係なく経常利益の目標を示したかったからです。損益分岐点比率の評価も中小企業経営者が元気になるように、80%に合わせ評価にしたり、赤字会社の多い中小企業でも希望が持てるように、本にはなかった200%以上をつくりました。未来会計図を使うと未来への仮説をシミュレーションできるので、ちよとした売上の増減、粗利益率の変化が経常利益に大きな増減を及ぼすことを知ることができます。競争相手との競争にも勝つことができます。現場で働く全ての人がこの戦略会計を理解すると、現場はむとむと活性化に儲かると思います。中小企業の給料が低いのは儲かっていないからです。未来会計図も使って儲けて高給手を実現してほしいです。次のオリジナル商品は、キャッシュフロー計算書です。キャッシュフロー計算書は財務3表といって上場会社等で作成が義務づけられています。このままの形では中小企業では使えませんでした。私は中小企業こそキャッシュフロー計算書が必要だと感じていました。よく聞かれました「儲かっているのにお金が苦しいのは何故ですか」。多くの人が儲かるとしてお金が残ることが全く別なのに同じだと思っていたのです。そこで私はキャッシュフロー計算書に言葉を入れ、わかりやすくしました。デザインも考え、会計上の利益とキャッシュフローの利益であるフリーキャッシュフローの額を同じ高さにしました。勘定科目の数、配列も考え、中小企業の社長、幹部でも使える表にしました。会計のプロである会計士、税理士の先生はこの違いを理解してくれています。資金別貸借対照表は、佐藤 幸利先生が考案された表で、当初入金金100万円と毎月の使用料3万円を払って使っていました。この表は未来のことがイメージできる最高の道具です。経営計画はP/LからではなくB/Sから作ると無駄のない、経営ができます。私は、日本の会計事務所のうち、1,000会計でこの目次決算書を使って頂きたい。この目次決算書ほど中小企業の経営に役に立つ会計資料はありません。会計事務所が手回しかけて中小企業の経営者や幹部に説明し、日本を中小企業が元気にしたいと思っていれば会計事務所から日本を元気にする道具として、目次決算書は最高の道具なので、日本中の中小企業の2%、5万社を当面の目標としています。多くのの人にこの商品も使って頂きたいのです。
※古田土流 目次決算書は、弥生社で弥生会計参謀役古田土会計版として販売(古田土 満)